

(参考資料)

昭和三年

会津戦争記憶記

星野なか

菊三郎三女

序

日月は流るる如く、歲月は人を待たずと古人は言つて居りますが、明治、大正も過ぎ、昭和の御代も已に三年となりました。私は辰年の生れで、六回の辰年を迎え已に七十三歳の老人となりました。毎春齡を加える毎に昔が恋しく子供時代の追憶することが多くなりました。此の春も昔の事どもを思い出して居た時に須賀川村の藤屋旅館が消失しました。

此の家は六十一年前即ち慶応四年の会津戦争当時会津方の勇将雲井龍雄、赤羽根幸一外七、八名が宿泊して居たものであります。此の火災は雲井龍雄等の宿った部屋より出火し家人は少しもえを知らず全焼であつて馬まで焼死した不思議な昼火事であるという事を聞き、そして此の火事が会津戦争より六十一年に当たつて居る事を思い出し、戦争当時の話をしても詳しく知つて居る者が少なく且つ其れ等の人々も益々記憶が薄らぐばかりであります。斯様な事は亦とないことだから戦争当時の様子を記憶して居るだけ紙上に残そうと思ひまして本書記を綴る考えです。

昭和三年 菊三郎三女 星野なか

## 戦争前に於ける異変

私は辰年生れで慶応四年には十三才でありましたから詳細のことは記憶して居りませんが見た事聞いた事を覚えのある限り紙上に残そうと思ひます。

父は菊右エ門、私はなかと言ひ当年七十三歳となりました。慶応四年四月初旬菌原村へ何処よりか浪人来り村の人々も其の浪人に加担して鎮守の森に立籠り「打壊し」を企て物持の家に押入り金銀財宝を奪い其の後で火をつけるとの評判高く追貝村の物持は夫々用心して夜は若者が警護しました。菊右エ門宅では数十人の人々が毎夜交代で警護して呉れました。橋場には畳を持出して屏風の様にして廻し、上には海蔵寺及び長泉寺の寺幕を張って鉄砲の防備とし獵師は鉄砲を持ち他は竹鎗を持ち昼夜見張りし殊に夜は橋板を引いて通行の出来ない様にして警戒して居りましたが「打壊し」が来ないので今度は此方より追拂うことになり小川越本土出等其の外の村々から若人が集り追貝村の人々が先達となり菌原に向つて出発致しました。此の時沼田様より早馬で召捕に来て菌原の浪人を捕縛して沼田城下につれて行きましたので追貝より進んだ若者達は其の儘引帰りました。此の時の老人の話に家は一軒も潰されず騒ぎは鎮まったが此の騒ぎは未だ見ない不思議な事で何かの前徴ではあるまいか、何か騒動でも起こらなければ良いがと云う事を聞きました。はたして五月官軍が上る様になったのであります。

## 大繰上と其之後に来るもの

慶応四年五月七日官軍千三百人来て追貝へ宿泊しました。之を大繰上(オオクリアゲ)と云います。其の時の名主星野十郎エ門宅には巡察使が宿つて此所が本陣となり菊右エ門宅には高崎様、その他主立った人々の家には各々大名方が宿りました。其の晩俄雨で平川の橋がはずれて翌日逗留となりました。又名

主宅は狭いので本陣は引換りとなり菊右エ門宅が本陣となりました。十郎エ門宅には高崎様が宿りました。其の時巡察使についてきたのが沼田藩の平尾三次の倅平尾伊太郎と云う人がついて来ました。其の人の着て居た赤いチョッキが今でも目の前に残って居ります。

平川村の橋は翌日人足二百人余で森の木を切り倒し一日でかけました。其の翌日官軍は戸倉に進みました。追貝では大楊、高戸谷三ヶ村の役人が追貝十郎右エ門の宅に晝夜詰切で人足四十人、馬二十頭で荷物の運搬早駕籠の送迎等を致しました。又其の時の継場は大原追貝平川でした。戸倉には昔より関所があり、関守と云う小番人がいてお上より扶持を戴いて居ったとの事です。

官軍は戸倉村に陣を張り其の時より会津方が繰り出し戸倉と会津の間の千の橋を間にして戦争をなし官軍が敗軍でありました。其の時の吉井隊長が敵の様子を見ようと橋の袂の柳の木に登って敵のために討ち落され即死したとの事です。其の時戸倉の村へ火をつけ一村丸焼となり官軍は追貝へ陣を引きました。其の時の巡察使は豊永寛一郎と記憶します。海蔵寺に宿って海蔵寺が本陣となり前橋様は菊右エ門宅に泊りまして木村栄吉と云う人でお作事方と云う事を聞きました。其の人の家来に下山様太と云う人も居りました。お太鼓方には斉藤足吉という人も居りました。

又菊右エ門宅では家を全部官軍に明け渡し馬まで出して他に頼みました。それで菊右エ門宅の台所には官軍の別当と馬が泊りました。茶の間には部人足が泊り、為に家内の者は薪小屋で飯を炊き倉の内に住って居りました。石上坂の頂上に見張小屋を作り、其の前に土手を築き大砲二門を其処へ据付け、平川の峠が一目に見える様に眼障りになる木は切り捨て昼夜交代で見張りを致しました。其の時の宿は星野藤吉宅に前橋様の金穀方が泊り其の人の名は米倉栄造、其の若党は立秋と記憶して居ります。又栄太郎と云う人も居りました。

星野嘉吉、星野森藏の両家には前橋様の散兵隊と云うのが泊りました。重兵衛宅には前橋様の医者が居りました。小林為吉の宅には前橋様の家来根室文吾と云う大目付だと云う人が泊り其の外主立った人の家には諸大名が泊って居りました。

花咲の千貫峠は沼田様と他の大名との二大名とで固めました。追貝では毎日調練をして歩いたり、石上坂の東に当る所に菊右エ門所有の四、五反歩にわたる荒地が有ったので毎日そこで調練をしました。それでその畑を調練畑と呼び今でもそう呼んで居ります。調練に使用した的板及び巡察使の宿札は菊右エ門宅に保存してあります。

其の次に今度交代になつて猿木十郎左エ門と云う人が来ました。其れが又代つて来たのが杉原軍規と云う人です。家来は松本勇左エ門と云う人で其の人は緋羅紗の陣羽織を着て紋は三階菱でした。お太鼓方は高橋友五郎と云う人です。

此の時泰平で何事もなく退屈だと云うので前橋様が刃道の道具を牛に二駄上げて来て菊右エ門の庭で諸大名が集り剣術を初めました。始めて二勝負やると須賀川村の役人が御注進と云つてやつて来ました。

「今会津方が見えました」と、それで剣術どころの騒ぎではなく、蜂の巣をこわした様に大騒ぎして諸大名が協議して海蔵寺に泊つて居る巡察使豊永寛一郎の許へ報告に行きました。其の報告は会津方の使者が八名須賀川まで来て泊つて居て巡察使豊永寛一郎に面会を求めようと云うのでしたけれども巡察使は面会を拒絶したのでした。而し官軍方は色々と相談した結果面会するからと云つて三人だけ須賀川の藤屋と云う宿屋に残し他の人全部連れ出して途中で殺す謀でありました。そして宿に残つた三人は殺して了つたが其の時松本勇左エ門は股を切られ尾畑藩の一人は即死致しました。其の時お太鼓方の高橋友五郎と云う人は早駕籠で追貝へ医者を迎えに来ました。医者は須賀川まで行き創口を縫い一旦追貝まで連れて来てそれより通し駕籠で前橋に送られました。

其の時打ち取つた会津方は赤羽幸一、羽倉鋼三郎、外一名の三名でした。そして二つの首は菊右エ門の宅へ、一つは久右エ門の宅へ持つてきて巡察使の実検を済まし須賀川村に於て七日間の晒者としました。其の時最後の日に親戚の者が来たところが鼻血を出したということです。その首は一旦は須賀川に埋めました。現在では東小川の棺に葬つてあります。そして親戚の者から香典料として若干下り付近の人は赤羽様を尊敬して参詣人が多い由です。

それから連れ出した人々は立沢の坂で挟み撃ちにする計画で目印をして置い

たのを味方の者より敵の方で先に見つけ逃げ出し、一人は下平村の田辺八弥と云う人を道案内にして会津迄行き、他の者は戸倉村迄山伝ひに逃げ戸倉村の星野辰五郎を道案内として会津迄連れて行き戦争が済んでから村へ帰されました。其の時逃げた人の名前は次の五人です。

桃之井金吾 雲井龍雄 近藤金吾

木村又次 小松野茂治 です。

残る一人は川伝いに摺渕村へ逃げそして吉沢春吉という東入二十三ヶ村の分限と云はれる大盡の家へ逃げ込みました。主人の春吉は官軍へ訴人すると云ふのを女房と娘が鳥でさえ家へ逃げ込んだのは助けるといふ譬さえあるのにまして人間だから訴人せず逃してくれと頼んだので到々二晩泊めて花咲の星野才治と云ふ下男に山伝ひに夜明けまで送らせて逃がしました。此の送った時の話は才治翁自身から戦争が済んでから聞きました。

官軍方では会津方を打ち取ったと云ふので前橋様へ早駕籠で御注進に行きました。其の時前橋の殿様の御隠居に盲目の清丸様と云ふ人があった相でこの人が此の事を聞いて御腹立になったとの事です。即ち少人数で来たものを多勢の大名が掛って打取ったのを手柄の様に思つて注進等に来るのはよくよくのことだと大層慨かれたと聞きました。

吉沢春吉

石橋県より役人来り其の時は大原の小林三郎が岡引の頭の肝入りと云ふ役でありましたので、そこへ出張して吉沢春吉に差紙を付けて呼出し、そこで縄を掛け直に江戸伝馬町の牢へ連れて行き一度も取調べをなさず、而して春吉は間もなく牢死して了った相です。これは新宅の三吉が差入れに従事して居りましたが死んだ為骨にして持帰りました。此の吉沢春吉の捕えられた原因は後に聞いたのですが大体次の様な次第です。

切合の時吉沢春吉の家へ逃げ込んだ一人が後足尾の庚申山に立籠り、足尾の

鶴屋、米屋、香屋の三軒の人々をさそい会津が若し世に出た暁には大名に取り立てる約束をして金を出させ、且つ連判状を作り置いたところがその落人が召捕えられ、従って連判状も見出されました。ところが其の中に吉沢春吉の名があつたので召捕えられる様になつたのだと云ふ事です。又他の金を出した人は遠島となり（鶴屋、香屋）その内の一人の手紙に依ると「吉沢は牢死し我々は島流しになつた」と彼等の実家へ書送つたといふうわさであります。

以上で私の知って居る事は終りましたが、過日上毛育英舎図書室に於て見たる小冊子「上毛及び上毛人」十月号に掲載せる

#### 亀岡泰辰記

#### 明治戊辰上州の戦鬪及予の初陣

と題した大体次の様な事が書いてありましたから参考として書き残す事に致します。

#### 抜粋

前方の敵状不明なるを以つて隊士松沢金三郎及び堀田藩士某を派遣し桧枝俣の方向を探偵せしむ。此の際曾て会津に在りしことありと云ふ白井村の商某を同伴して案内せしむ。然るに途中松沢氏等の風貌を察するに言語その他の動作到底士風を脱せず、商人と同行するも反つて疑惑を深ふするを以つて一人にて行くに如かずと思考し途中尾瀬沼の辺より松沢氏に請ふて帰らしめ単身敵地に入るも遂に捕えられて投獄せらる。若松落城の際出獄せしめられ間を窺て脱出して前橋に帰る。

同十一日 戸倉には予め関門あり、その守備は沼田藩及び足利藩の任ずる所なるも探偵疎にして蒙も敵状を審にせず、是に於て巡察使豊永寛一郎、本藩隊長木村栄吉、吉井藩隊長某は協議し自ら敵に当り強襲して敵状を得んと欲し身

体強壯にして決死の士を募る。余また之に応じ其の選に当る。其の他隊士の其の選に当る者中東輔八、星熊太郎、村田要太郎、上條山三郎、川崎萬平にして吉井藩士二三名之に加り午前七時本營に会合して出發す。

往路は戸倉の関所を経て約一里許にて十二平の平野に出で之を通過すれば行に從い難路にして僅に歩を容るるに足る細道なり。約三里にして三平坂なる小峠あり。路傍熊笹繁茂し長さ丈余に達するもあり。暗黒殆んど道路を辨ぜず僅に溪間を伝ふて進み嶺頂近く達する時計らざりき。爰に敵の哨兵あり。

燎火を焚き監視して居れるも油断して余等の来るを知らず。その不意に出ずるを驚愕して遁走せり。之を追跡して警戒しつつ嶺頂に達す。北方を觀望すれば山麓は一大沼地にして北岸に一線の門壁を設け守備するものの如し。嶺を下りて沼の沿岸に達す。之れ即ち尾瀬沼にして上野陸奥の国境なり。此処は戸倉松枝俣の中央にして何れも四里を隔つ爰に又、三軒の小屋あり。人の住居せし形跡あるも今日は其の雙形を見ず。平常は上奥兩國の商人が物品主として北方より材木を運輸し來り交換する所なりと云う。即ち小貿易場なり。此より先は沼沢の水深溢し何れの方向に道路あるや発見するに苦しむ。沢中足跡の濁れるものあるを認む。之れ多分今の哨兵の逃れし跡ならんと想像し之を辿りて暫く小徑に達するを得たり。尚少許にして樹木を斬倒し之を縦に敷き列ね副防禦を設くるに似たり。

暫くにして向岸に達し西方を顧みれば数百歩にして先刻嶺より見たる胸壁の左側に出ず。敵の歩哨の為に発見せられて射撃を受く。我亦之に応じ急激発砲して襲撃す。彼れ亦警報を發するものの如くなるを見て既に我目的を達したるを以つて少数人員にて深入する能はざるに依り速に退却し去つて三平坂の中腹に來り顧望すれば果して胸壁中に多数の人員顯れ守備に就たるものの如し。然れども彼敢て追撃し來るの状況なきを以つて徐々に嶺を下り溪流の傍に休憩し辦当を喫し日没の頃戸倉に戻り名主某の宅に入り休憩す。沼田藩士來りて勞を慰し名産の蕎麦を饗す。夜八時過る頃土出の本營に歸る。之を機して爾後屢彼我斥候の衝突あり。

同十四日 本藩より同僚として阿部悦太郎、指揮助役として若林三之允、新庄官五郎。中慶太郎を差遣せられ到着す。之皆殆ど同年輩の友人にて従来助役

なるものなかりしが新に設けられたるものにて予の配下につくは聊か面恥ゆき感禁ずる能はず。

同十八日 戸倉に優勢なる敵の襲撃あり。攻撃甚だ急なるを以って援を乞ふこと頻発なり。土出にありし各隊は正午頃本営に於て小銃連発警報を伝ふるを以って皆舎前に整列して本営の命を待ち戸倉に急行し又土出を警備するものあり。戸倉に向ふ隊は途中に於て黒煙天に漲るを視る。又中間河川の橋梁を焼失せられ渡河を妨ぐ。依つて川を徒渉して進むも既に遅く戸倉村は全村敵の為に焼却せられ最初敵襲あるや同地守備の任にある沼田足利両藩の兵は勇敢に戦ひ中央道路を進撃し来る敵は砲兵霰弾射撃の為に苦しみ稍恰も左右両側の山上に展開せる敵は其の動作敏捷にして且狙撃最も巧にして到底我兵の及ぶ所にあらずりと云ふ。之幕府脱走の歩兵ならん。土出より援軍到し時は最早守備兵は大敗の後にして敵已に遠く去り追撃更に効なし。

戦死及び負傷者も夥しく又本藩は不覚にも護衛兵もなく只輜堂のみを前方戸倉に置きたるをもつて盡く焼却せられたり。予等は土出村北方地方出口に砲兵陣地を設け新米の同僚以下を督して陣地構成に勉め同夜露営して警戒す。

六月五日

戸倉口の警衛は前橋藩の一手受持に帰し巡察使始め其の他各藩の兵は盡く引拂ひ帰途に就く。前橋藩より狙撃四番隊（上等士族隊）銃隊（中等士族隊）散兵隊（卒族隊）砲兵隊来り之に代る。数日後、雲井龍雄等来襲のことあるも之を略し他日を待つて掲ぐる事あるべし。

「上毛及上毛人」よりの抜粹終り

尚、昭和三年十月二十日頃の東京讀賣新聞に大要左のような記事がありました。

米沢市では二十八日米沢が生んだ維新の風雲児雲井龍雄の六十年祭を執行す



るが、この程偶然にも雲井自筆の「義僕義平執成の草稿」を中條病院山下副院長が所有して居る事が発見された。同書は明治元年六月彼が薩藩の横暴に憤慨し「討薩檄」を發し会津戦争に参じ南会津の山間を転々し苦難を共にした米沢市外高置賜村生れ僕義平のために藩主に表彰方を申請したもので「六月江戸脱出より」と起稿し（中略）上州沼田で戦死したと伝えられる羽倉鋼三郎は須賀川で殺害されて居り当村南会津桧枝股を根拠として居ることがわかる（中略）。最後に江口米沢中学校長が研究中であると結んでいる。

\* 「この追憶記は星野なかの記憶を口述したものをなかの孫（仙五郎二男）の武夫がそのまま筆記したもので、当て字多く特に文中の人名は当て字であることを附記して置く」と箱の裏に記されています。

## 後記

右の追憶記は、笠松が過日追員の星野波奈子さんを訪ね、永井いとや戊辰戦争に関するお話を伺った際に見せていただいた手書き原稿を、波奈子さんのご厚意でお借りし、活字化したものである。基本的に原文の用字や言い回しに忠実であることを心がけたが、読む際の便宜を考え、読点を入れ改行を行ったところがある。もちろんそれは最小限に抑えたつもりである。

なお、このなかさんの追憶記は『利根村史』に多く引用されている。（十四、会津戦争と本村」p.122-128）。

笠松 亮

星野なか

安政三年（一八五六年）利根村追貝の、菊三郎の四女に生まれた。夫を迎えて家を継ぎ、五男一女を育てて家政を支え、村の婦女子の副業指導と精神教化に努めた。

冬の長い山間地の農家の婦女子は、屑繭で糸をつむぎ、自家用の布を織っていた。彼女はそれを自給だけでなく、副業化して収入を上げさせようと考えた。昭和二年の春、私財を投じ十三坪の機織場を新築、新式の高機を五台と機具を購入整備した上で村へ寄付、技師を招いて講習会を度々開き、婦女子に伝習させた。さらに奨励のため専属教師を雇い、材料も自費で買い、受講者に与え、織り上げたものは持ち帰らせた。努力が実り、機織り熱が高まり、農閑期には受講者が多いので、彼女は寒気もいとわず、昭和八年七十七歳で没するまで、老躯を機織場へ運び、雪の降る日は家人に背負われて行き、手を取って指導した。場内に機織神社を建てて精神修養をさせた。

この善行を知った天岡賞勳局総裁は賞を贈り顕彰した。神社と機織場、機具は同所の中学校に保存されている。

『群馬県人国記』利根・沼田・吾妻の巻（岸大洞・五十嵐富夫・唐沢定市著  
歴史図書社 昭和五十四年四月発行）より

（注）この文ではなかは四女となっているが、なか自身の話では三女である。